

消費者の期待に応える

安全・安心な有機栽培の実践

(七飯町 ついき農園 築城 正行 氏)

1 経営の概要

- (1)有機栽培経験年数 20年
- (2)経営規模
5ha (うち有機栽培 4.4ha)
- (3)労働力
3人(本人、妻、後継者)
季節雇用70~80人/年



(4)作物別作付面積及び生産量 (H19年)

写真1「ついき農園」

区分	品種	面積(a)	うち有機栽培面積	総生産量	うち有機栽培生産量	有機栽培実施年数	その他	備考
水稻	ゆきひかり	40	40	1800	1800	14		
	ふっくりんこ	175	140	7875	6300	7		
	ななつぼし	25	0	1125	0	0		除草剤1回
水稻計		240	180					
だいこん	T340、はると、耐病緑太	60	260			20		H5年には畑の7~8割を有機とした。
にんじん	愛紅、紅陽	60~70				20		
とうもろこし		1				20		
かぼちゃ		30				20		
じゃがいも						20		
ほうれんそう	ミストラル	ハウス6棟 13a				20		
春菊						20		
小松菜						20		
トマト						20		
なす						15		
はくさい						15		
ながねぎ					15			
ピーマン					20			
ズッキーニ				15				
畑野菜計		260	260					
経営面積合計		500	440					

2 有機農業取組の経緯等

(1)有機農業の取組動機と経過

- ・子供達、家族に安全なものを食べさせたいという気持ちから有機栽培を始めた。
- ・ポラン広場(有機取扱専門店)の人たちとの出会いにより、さらに有機栽培を志向した。
ポラン広場=有機農産物をつくり育てる農家、有機加工食品を製造する人、それらを販売する人、そして食べる人たちのネットワーク
- ・平成12年に有機JAS認証制度が始まり、取引先(八百屋)から有機の認定を取得するよう強い要望があったため、平成13年に有機JAS(有機農産物)の認定を取得した。
平成17年には有機JAS(有機飼料)の認定も取得し、鶏のえさを作っている。

(2)有機農業取組の考え方

- ・消費者に期待されているのでやめられない。
- ・自分や家族の健康も大切である。

3 有機栽培管理技術等の特徴

[有機栽培管理の概要]

- ・全作物、基本的に手作業を主体とした栽培管理体系である。
- ・米は、アイガモ農法により害虫駆除と雑草除去を実施している。
- ・野菜については、病害の問題となる夏の暑い時期を避けて栽培をしている。
- ・耐病性の強い品種を利用するようにしている。
- ・当初、虫害での失敗はあったが、病害については問題無く生産できている。

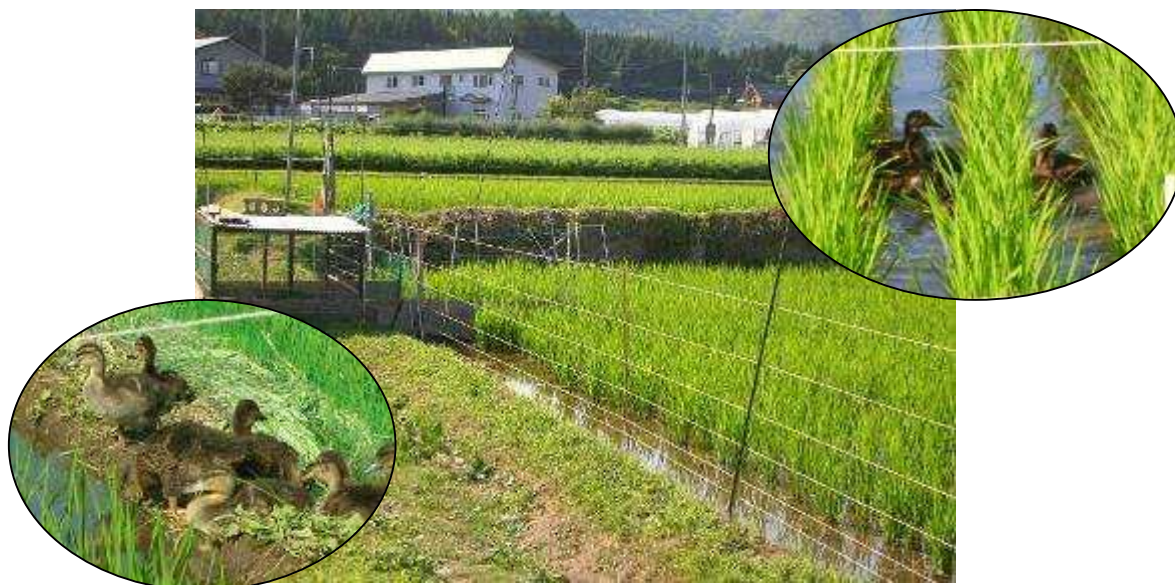


写真2 アイガモの放鳥水田

[栽培管理技術等のポイント、工夫]

(1)土づくり

- ・肥料は、ぼかし肥、発酵鶏糞を施用している。
- ・たい肥は、購入した牛糞たい肥を稲わらと混合、熟成した自家製堆肥を使用しており、水田は春、畑は秋に散布している。

施用量および施肥法

区分	施肥資材名	施肥量10a当	施肥方法	備考
水稻	たい肥	3トン	全層	
	ぼかし肥	30kg		
	発酵鶏糞	100kg		
野菜、畑作物	たい肥	2トン	全層	露地畑の2作目は無肥料
	ぼかし肥	200kg		
	発酵鶏糞	200kg		
	サンカルシウム(ホタテ)	60~80kg		

- ・緑肥は病害虫防除を兼ねて、エン麦（ヘイオーツ）を植えてすき込んでいる。
- ・暗渠排水、サブソイラーの施工により排水対策に努めている。

(2)病害虫防除

- ・有機JASの規格で認められている農薬であっても基本的に殺菌剤は使用しない。

・害虫防除

問題となる害虫	対策資材	方法
ヨトウムシ	粘着資材の使用 を検討中	基本的に手取り
アブラムシ		
ネキリムシ		
アカヒゲホソミドリカスミカメ	ハーブの栽植	7~9月は畦草刈らない

(3)除草対策

問題となる雑草	対策資材	抑草対策
スベリヒユ		手取りおよび刈り取り
ノボロギク		
ヒエ	2回代かきしたが失敗 田植え前に板を引っ張る	手取り1回
オモダカ		

(4)その他

- ・にんじんに根こぶが発生したため、エン麦（ハイオーツ）を作付けし、輪作に努めている。

4 生産物の出荷・販売

(1)有機 JAS 認定による有利性

- ・「有機」と表示できる（一般栽培と差別化できる）有利性があり、一般栽培より高い再生産できる価格で販売できている。

(2)販売先

- ・自宅前での直売のほか、市場や札幌の有機農協、生協などへ出荷している。
- ・地元では函館の八百屋とその紹介で有機野菜の扱い店、ホテルへ卸している。

(3)販売先との取り決め

- ・有機農協とは出荷基準を取り交わしている（多少の虫食い等は許容範囲）

5 消費者との交流の取組

(1)消費者との交流

- ・コープ主体の収穫等、農作業体験の受入を行っている。

(2)農業体験

- ・小学校の農業体験のほか、一般の農業体験も随時受け入れている。
- ・研修も可能である。

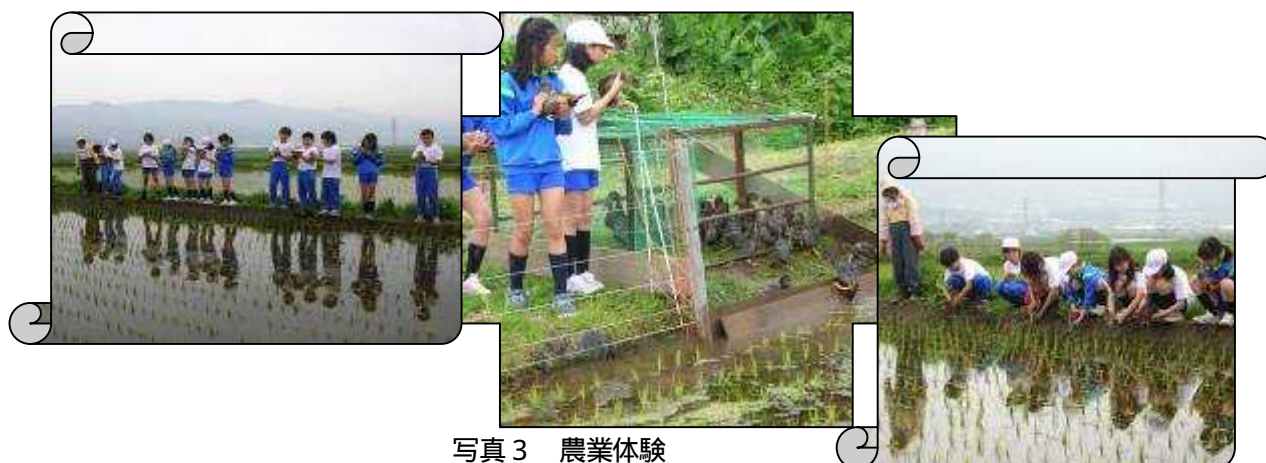


写真3 農業体験

(3)直売

- ・自宅前での直売では、消費者と直接対話しながら販売している。

(4)レストラン活動

- ・以前から農業体験に来ていた人が、今年から、直売所2階を借りて、レストランを開業しており、野菜などの食材は築城氏生産の有機栽培野菜を使用している。



写真4 自宅前の直売所



写真5 有機野菜等を使ったメニュー



写真6 直売所2階のレストラン

6 生産者のつながり、関係機関・団体等との関わり

(1)生産者のグループ化

- ・アグリネットななえ、有機農協のグループに参加。

「アグリネットななえ」は、七飯町においてグリーン・ツーリズムを展開している農業者等の相互の連携と、都市住民とのふれあいを推進し、農業・農村への理解の促進や、農村地域の活性化を図る事を目的に設立された組織。

(2)ネットワーク構築

- ・「アグリネットななえ」の活動の中で直売や食育活動への参加支援を通じてPRができています。

(3)役職等

- ・地区農業共済委員、土地改良区総代、農協総代

7 今後の課題と方向

- ・有機農業は増えていかなければならないと思うが、消費者教育、流通改革をしてからでなければ厳しい。
- ・自家経営としての有機栽培規模は、パート従事者が少なく、手がかかるのでむしろ縮小方向で考えている。大根・人参も手がかからなければ拡大するが今の雇用状況では厳しい。
- ・除草対策の情報が欲しい。金をかけずに機械化対策を考えたい。
- ・有機栽培が増えると販路が狭まる危機感はある。
- ・今後は、安全・安心のほかに取扱者および消費者のニーズが良食味（おいしさ）へ向いてくると考えている。

作成：渡島農業改良普及センター